

谷 迫 間 古 窯 址

発 掘 調 査 報 告 書

岐 阜 県 教 育 委 員 会

可 児 町 教 育 委 員 会

ご あ い さ つ

財団法人岐阜県開発公社は、公害の出ない緑に囲まれた工業団地を可児郡可児町谷迫間地内に建設することになり、文化財の有無について県教育委員会へ事前協議がもちこまれた。

文化課では可児町教育委員会・開発公社職員と予定地内の踏査をおこない、古窯址1基を発見し、「谷迫間古窯址」と名づけた。このため県教育委員会は、開発公社に対して古窯址の現状保存を要望したが、工業団地の造成上、保存が不可能となり、やむを得ず発掘調査・記録保存の処置をとることとなった。ただし、重要な遺構が発見された場合には、協議の上、必要な保護処置がなされることが約束された。

昭和47年7月15日、岐阜県開発公社と県教育委員会は発掘調査の委託契約を締結し、発掘調査は可児町教育委員会の手をわずらわした。

今日のように大規模な開発が進むと、次々に貴重な先人の歴史的遺産が滅失していく傾向にある。開発と文化財保護は表裏の関係にあるとはいえ、県民の方々のご協力によって、文化財を永久に後世に伝えたいと念願しつつごあいさつとします。

昭和49年1月

岐阜県教育委員会

教育長 横 山 勉

序

谷迫間古窯の調査が完了した。調査に当たっていただいた大江命主任調査員を中心とする調査員の方々、調査に関する色々の仕事を完遂された可見剛平氏、又発掘作業に協力された地元の方々に深謝する次第である。

小高い雑木におおわれたこの地に今より900年余の昔、即ち平安時代に陶窯が営まれていたとは全く知られなかった。たまたま今度、県開発公社によってこの山地が開発され、工業団地造成工事が始められるに当たり、色々な地元の人々の協力により教育委員会において現地踏査の折、落葉の下に灰軸陶器の破片を確認したことに始まった。調べて見ると多くの灰軸陶器片や馬爪型焼台が散在していて古窯の灰原の跡であることが判明した。そこで県文化課の方々と踏査、協議し、県開発公社の方へお願いをし調査費を調達していただき、調査の実施となったのである。

発掘された数々の陶片、窯址などから相当高度の技術をもった陶工が製作に従事し、当時としては優れた陶器を生産していたことがわかってきた。この地方における陶器の歴史を研究する上に貴重な資料が得られたのである。詳細は本報告書を見ていただきたいが、私共が拝見しても珍しい大鉢などが出土している。勝手な推察であるが、当時朝廷へ或は平安の都へ送り出していたのではあるまいか。相当に優美なものが焼かれていたように思われる。専門的なことはわからないが、調査員の話ではかつて大陸から帰化した人達が技法を伝え、その流れが受けつがれた平安時代の時期のものと言われ、この古窯から貴重な資料が得られたのである。

調査研究に当られた方々、又、本報告書の執筆にあられた大江命、田口昭二、大江上の諸先生、また熱残留磁気測定を賜った大阪大学基礎工学部中島正志、夏原信義、浅井至、今川孝仁の諸先生の労を謝すると共に陶窯の研究の進展を祈る次第である。

可見町教育長 只 腰 左 門

発掘調査団

団 長	可 見 町 長	林	桂
事務局長	可 見 町 教 育 長	只 腰	左 門
県文化課		波 多 野	寿 勝
主任調査員	日本考古学協会員	大 江	命 国
調 査 員	岐阜県考古学会員	中 島	勝 昭
	"	田 口	二 上
	"	大 江	上 正
調 査 補 助 員	町文化財審議委員	統 木	綱 平
	岐阜県考古学会員	可 見	鋼 雄 之 助
調 査 協 力 者	"	稻 垣	静 晃 司
	"	今 井	野 晃 庄
	"	上 野	川 庄 準
	"	古 川	瓶 井 勝
	"	三 瓶	井 藤 鎬 平
	"	桃 井	佐 藤 羽 利 男
	町 教 育 委 員 長	丹 可	見 井 六 丑 美 男
	町 教 育 委 員	堀 井	金 子 敷 雄
	"		
	町文化財審議委員長		
作 業 協 力 者	太 田 静 雄	太 田 広 吉	
	太 田 勇	太 田 文 夫	
	太 田 明	加 藤 劍 一	
	梅 田 ス キ	大 森 寿 子	
	可 見 貞 子	津 田 ふ さ	
	長 谷 川 さ え 子		
事 務 担 当	小 沢 末 広	田 口 茂	

目 次

ごあいさつ	岐阜県教育長 横山 勉
序	可見町教育長 只腰左門

1. 発掘調査経過	5
2. 谷迫間附近の地形と現状	6
3. 古窯の構造	7
4. 出土遺物	11
5. 出土遺物実測数値表	19
6. 輪花施文の技法について一、二の考察	23
7. むすび	24

挿 図 目 次

挿図1 谷迫間古窯址附近の地形図	6
挿図2 谷迫間古窯址地形図	7
挿図3 谷迫間古窯址窯体構造実測図	9
挿図4 谷迫間古窯址灰原断面図	10
挿図5 出土遺物実測図	12
挿図6 出土遺物実測図	14
挿図7 出土遺物実測図	17
挿図8 出土遺物実測図	18

図 版 目 次

図版1 谷迫間古窯遠景・発掘以前の遺跡の状態・発掘風景
図版2 窯体・煙道部からみた窯体・窯壁の一部
図版3 煙道部の遺物遺存状態・灰原の遺物出土状態・窯内の遺物遺存状態・灰原堆積状態
図版4 大碗・同左上底部・輪花大碗・大碗・同底部
図版5 中碗・小碗・托および小皿・同底部
図版6 大鉢・片口大鉢
図版7 広口瓶・瓶・壺・大鉢底部
図版8 口縁部・台部?・硯・同底部・蓋・三叉トチ・馬爪型焼台
図版9 托・同底部・小碗と耳皿・同底部・耳皿
図版10 大碗・大碗と小皿・窯道具・窯壁に見られる布目痕
図版11 丸皿・同底部・山茶碗・同底部・山茶碗底部
図版12 輪花碗片・輪花碗・輪花碗片・同内面・小皿の内面・輪花碗片

1. 発掘調査経過

調査に至るまでの経緯

1972年岐阜県（美濃国）可見郡可見町谷迫間字筋洞 753 の 1 に平安古窯址の存在する事が、県開発公社における工業団地造成予定地内にあるとの地元の人々の話によって知られ、町教育委員会によって確認され、その後、県教育委員会と共に現地調査を行ない、更に開発公社と協議の上、発掘調査を行なう事に決定し、大江が調査の依頼を受け、7月に調査について県教育委員会文化課波多野氏と可見町教育委員会只腰教育長、小沢主事諸氏と具体的な打ち合わせを行ない、別記のような調査団を編成し、8月20日より発掘調査を行なうことに決定したのである。

発掘調査経過

昭和47年8月21日 現地にて発掘計画を立て、大江、小沢、続木、可見によって調査に対する協議を行なう。8月23日より立木の伐採を行なう。現地は雑木林で作業は困難をきわめた。

8月27日 大江上ほか測量班、大森、可見、長谷川のほか、可見鍋平にて遺跡より約300m先の三角点より順次高さを出す。8月29日 測量班は地形測量を行なう。大江主任調査員より作業員に対して指示を行ない、灰原の発掘と窯体の存在すると考えられる地点にトレンチを設定する。窯体の存在はすぐに確認される。8月30日 古川、田口の参加を得て窯体の部分の調査と灰原の発掘を平行して行なう。8月31日 前日と同じ作業を行なう。

9月1日 窯体の上部に遺存遺物が知られる。この部分の遺物は未焼成のものである。9月2日 分焰柱の部分に少量であるが遺物が残存している事が知られる。遺物を残しながら作業を進める。9月3日 窯体の測量を行なう。床に溝を入れ窯床下の調査を行なう。9月5日 窯体の附近に別の窯の有無を調べるため、第4地点にトレンチを設定する。山茶碗片が少量出土するのみである。9月6日 窯床の実測図をとる。9月7日 灰原にのこしたアゼの実測を行ない、アゼの発掘を行なう。9月12日 灰原より出土した馬爪型焼台の数を記録する。1,300個出土する。

9月13日～18日 遺物の運搬及び仮整理を行なう。9月21日 現場一帯の測量を行なう。一応現場作業は終了する。昭和48年3月31日 熱残留磁気測定を行なう。遺物整理を昭和48年3月までの期間中に行なった。（大江命）

2. 谷迫間附近の地形と現状

谷迫間古窯址は行政区として岐阜県可児郡可児町大字谷迫間字栃洞753の1にあり、美濃加茂盆地中央部を木曽川が流れ、左岸には美濃加茂市・右岸には可児町が位置する。盆地西南端には秩父古生層をもって構成された犬山山塊があり、それに連続した低丘陵性山地が、東は多治見・土岐方面に連なっている。この低丘陵性山地と美濃加茂盆地を境として、木曽川支流の可児川が本流と同じく東西方向に流れ、南北方向に流れる多くの可児川支谷によって、この低丘陵性山地を開析している。

古窯址が位置する谷迫間地内は 標高 150m 前後の丘陵山地の東向斜面で、尾根より約10mほど下方に古窯址が立地し、更に下方の東面は急斜面の谷になっているところに湧水地点が見られ、その附近に小さな水田が最近まで存在していた。この丘陵山地の地質は中新統に属し、土岐砂礫層などが一部をおおっているものと考えられる。尚、この丘陵山地の林相は活葉樹と針葉樹であり、特にこの古窯址附近は松林となっており、この地区内の部落共同の入会地であったため、最近まで燃料用の柴および枯れ松葉などを毎年期日を定めて収集していたことが知られた。(大江上)

参考文献 飛騨・木曽川自然公園調査書 岐阜県・愛知県 1960年
岐阜県史「通史編原始」岐阜県の地形および地質 井関弘太郎 昭和37年

挿図1 谷迫間古窯址附近の地形図



古窯址の位置—

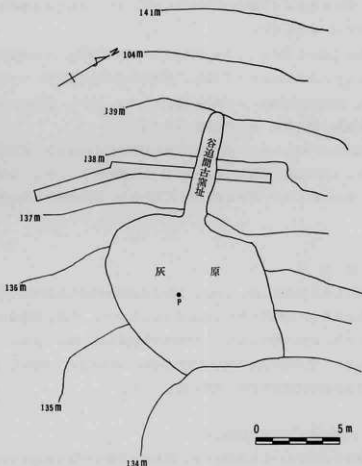
3. 古窯の構造

本窯(挿図3, 図版2)は灰軸陶器の窯であるが, 天井部はすでに流失している。床面と地下部分の側壁がほぼ全体にわたって残っており, 構造は天井部を除いてはよく知りうる事ができる窯で, その様相からして半地下式窖窯である。煙道部端から焚口までの長さは6m70cmある。上部から煙道・焼成室・燃焼室の三部分に分れるが, その各部について更にくわしく記す。

(4) 煙道部

天井部はすでに流失している, 全構造を知ることはできないが, 現存全長1m60cm, 幅上端80cm, 下端1m10cmの梯形に近い。側壁は流失し, 扁平な床面のみが残っている。中央部の傾斜は22度である。この煙道部の特色は, 床が上層と下層の二層に分かれ, 上層には, 碗・托・皿などの遺物が残存している。残存遺物は, 下層床面上にも皿・托などが見られた。上層の床面を形成するとき保温をねらって混入させたの

挿図2 谷迫間古窯址地形図



か、それとも煙道内でも遺物を焼成したのかははっきりしない。しかし上層床面上では馬爪型焼台の付着は見られなかったが、図版3の左上にも見られるように遺物との焼台が混在して検出されたので、焼成が行なわれたと考えるべきである。また、煙道部の構造が扁平で梯形をしているのは、美濃古窯址群のなかでは類例をみない。

㊦ 焼成室

分焰柱を境にして燃焼室と区別されていて全長3m15cmある。幅は中央やや下よりの部分がかもっとも広くて1m35cmあるが、全体の形状は長方形をしている。天井はすでになく、側壁は地下部のみが残存し、残存部は深くて60cm、浅くて10cmほどである。従って、もとの天井までの高さを知ることはできない。

なお、側壁は図版2右下のように、スサ入り粘土をたたきつけ、手で整えた痕跡がみられる。一部には布をあてて整えた痕跡もみられる。^{註1}これらはあとから補修したものか、当初からのものかははっきりしない。

床面は上端から床にそって3mまではほぼ同一傾斜で下降し、その傾斜角は平均37度あり、3mのところからゆるいカーブで下降し、分焰柱の近くではほぼ水平になっている。

また、窯床下の色調は、その断面の観察によると、上から、黄白色・黒褐色・青灰色・黄褐色・赤褐色・淡黄褐色（地山の色調）の順である。

窯内遺物の状態をみると、碗・皿その他の器物を据えた焼台が、窯床の各所に残存しているが、もとは窯床全面に隙間なく並べられていたと思われる。しかし、発掘時は18個が付着していた。剝落したものの一部が分焰柱近くに見られた。製品は碗が2点と数点の破片が残存していた。

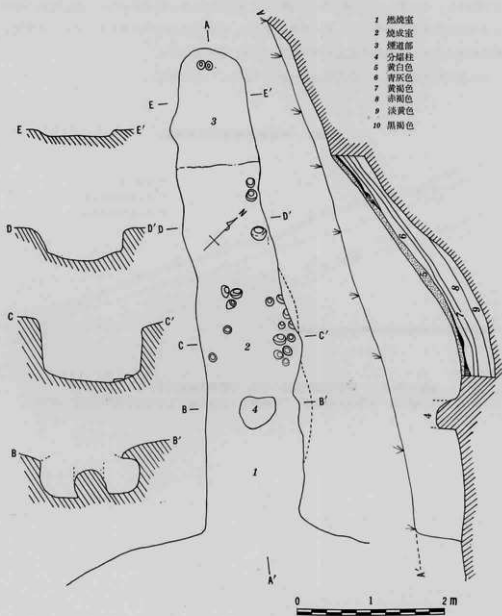
㊧ 燃焼室

分焰柱を境に焼成室と接している。分焰柱は径50cm内外の不正円形であり、高さ約25cmを計る部分が残存し、材料はスサ入り粘土でつくられている。床面と側壁の残存部は焼成室からつづいており、変化は認められない。分焰柱の中央における幅は1m43cm、焚口における幅は1m15cmあり、分焰柱中央から焚口までの長さは1m60cmある。床面は、約3度で水平にちか。なお本窯の前庭部で下降し灰原に達している。

㊨ 外部施設及び灰原（挿図4）

前庭部から灰原にいたる傾斜面には、排水溝その他の特別な施設はない。また、灰原中にも径約30cmの小ビットが1カ所認められたのみである。

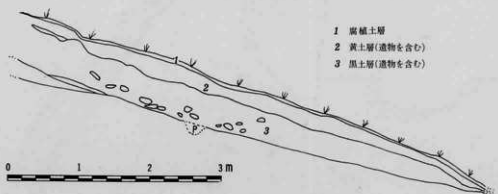
插图3 谷迫間古窯址窯体構造実測図



灰原は、約13度の傾斜地にほぼ円形に広がり、面積は約64㎡ある。窯前より、灰原下端にいたる断面の観察によると、地表より下層へ向って、第1層は腐植土層、第2層は黄土層（上部より流れこんだ土壌）、第3層は黒色土層（灰・遺物を含む）、第4層は地山（地山表面には約5cmの砂層がある）の順になっているが、深さは、灰原の上部で約90cmあり、そのうち黒色土層は約50cmある（これは虎溪山1号窯と比べると、約半分である）^{註2}。

出土遺物の大部分は、この灰原からの出土である。（田口昭二）

挿図4 谷迫間古窯址灰原断面図



註1. 発掘後雨に洗れ、熱残留磁気測定の際に、中島勝国調査員等によって確認された

註2. 田口昭二他「虎溪山古窯址群」「平尾遺跡・虎溪山遺跡」多治見市教育委員会 1970年

4. 出土遺物

窯内、灰原よりの出土遺物は、碗類、皿・托類、鉢類、瓶類、壺類の他に硯、蓋、窯道具などが出土している。これ等の出土資料中、その出土地点における相異は、まず煙道部に当る窯内上部において、焼成不充分的碗及び托が出土している。また、分焰柱の周囲の窯内に少量であるが、窯内上部に見られた資料の小破片が認められたのである。これ等の窯内遺物と、灰原における遺物は器形の上で異なるものとして、碗類と托類が知られる。まず碗類では、挿図5の18、19に見られるように器高が低く、口径の大きく開いたもので、これに類するものは灰原においては、二、三点見られた以外は全く別の器形の碗類である。次に托であるがこれも灰原においては、少量その破片と推定されるもの以外は全く知られなかった。また地点を異にしているが、山碗茶片が少量出土している。

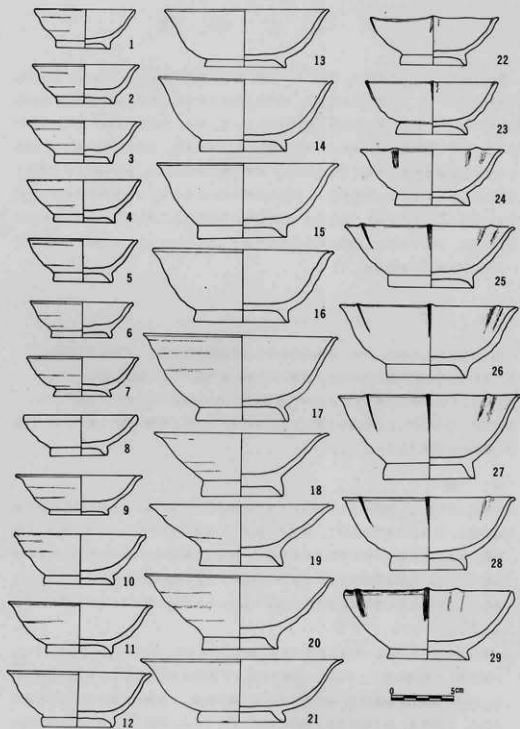
碗 類

碗に分類されるものは、灰原、窯体内における生産遺物の絶対量として最も多く出土している。その中より器形の測定値の口径、器高、高台径、高台高の4点の測定可能なもの237点を抽出して、口径13cm以上を大碗、10.5cm～12.5cmを中碗、10cm以下を小碗の三種類に大別し、更に器形、特長などにより細別して考察すると次のようである。軸調の良好なものが見られるが、全般的に軸調はあまりよくない。

大 碗

- (i) 挿図5の18、19、図版4左上に見られるような器形を示している。これは口径に対して器高が低く、高台がほぼ直立を示し、腰部より外反し口縁部が更に外反して大きく開いたものが見られる。また高台の径は平均6.5cm前後で、付高台の断面は三角形で、高台内に糸切痕が認められる。色調は焼成不充分的ため黄色であり、きめの細い粘土を胎土としている。先述したようにこれ等の遺物は、窯内の上部より出土したものが大部分である。灰原ではほとんど出土していない。
- (ii) 挿図5の14～17、図版4に見られるように、腰部が丸味を示しながら口縁に立上っている。口径に対して器高は前者より高い。高台は付高台で断面は三角形のものと台形のものがある。高台の径は7.2cm前後で、高台内に糸切痕が見られる。その他に大碗の中に輪花碗が見られる、工具圧痕、指圧痕による五輪のものが大部分である。挿図5の21のように口径16cm

插图5 出土遗物实测图



に対し器高4.9cmの平碗状のもので器形の知られるものが見られる。これに類する破片が少量知られる。色調は鼠色を呈している。

Ⅳ 挿図5の20に見られるような高台の径が小さくて、口縁に向かって逆八字状に開いているものが一例知られる。挿図5の29、図版4の輪花碗は、口縁部が面取りされているもので、それに輪花が見られるものであり、Ⅱ、Ⅲの大碗とは異なっているのである。色調は灰白色である。一例のみ出土しているが、同じような面取りのある小碗が一例知られる。

中 碗 (挿図5の10~12.22~24)

中碗は口径11cm前後のものであり、器高は4.3cm前後である。大碗のような形態の変化はあまり見られない。腰部に丸味を有し口縁部に外反している。輪花中碗は四輪ある。輪花の幅は0.5cm前後で長さ1.5cmの細いものである。高台は付高台で、高台内に糸切痕が認められる。

小 碗

小碗は口径10cm以下で、平均9cm前後であり、器高は3cm~3.5cmである。大、中碗に比較して器厚が厚く重量感がある。腰部に丸味を有し、口縁部が外反を示すものと、腰部に丸味がなく、口縁部に外反の見られないものがある。高台内には糸切痕が見られる。

皿 類

丸皿、段皿、耳皿托などが出土している。これ等の皿類も碗類同様にあまり軸調のよいものが見られない。

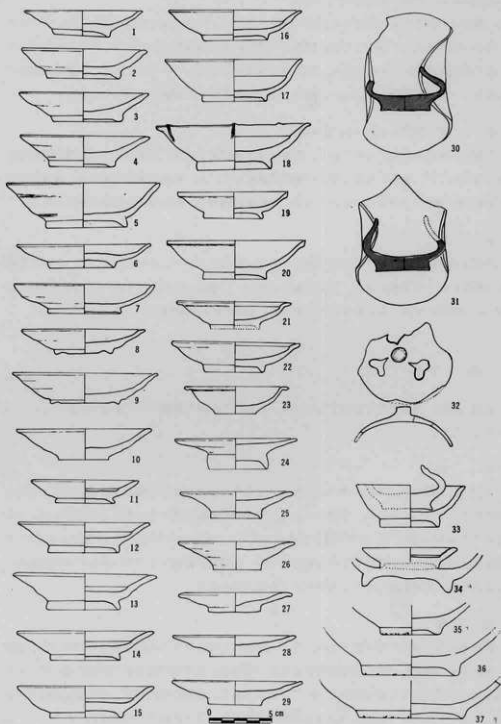
丸 皿

丸皿は、挿図6の1~10、19~23に見られるように色々な変化に富んでいる。中には平碗と思われようなものもある。大別すると、まず腰部に丸味を示さないものと(同図1~5)、丸味を有するもの(同図6、7)、高台の部分が付高台でなく、高台の内面をけづって成形したもの(同図8、9)、高台部が糸切底のままのもの(同図10)、口縁部が面取りされているもの(同図19、20)などがある。実測数値が示すように大きさも色々知られる。

段 皿

段皿も丸皿のように種々見られる。まず、腰部に丸味を有するもの(挿図6の16、17)、丸味の無いもの(同図11~15)、輪花を有するもの(同図18)、また段の部分が口唇部に近い部分に丸味を持って見られるもの(同図21、22)などが見られる。段皿の中には全く形式的に段が付けれ、粗雑なものも多く見られる。また同図18に見られるように輪花の段皿も見られる。

插图6 出土遗物实测图



耳 皿

耳皿は挿図6の30.31などのように耳部にヒダが大きく、底部が糸切のままのものであり、施軸が明瞭なものと同明瞭のものが知られる。

托

挿図6の24～27に見られるように、ミコミの部分が扁平に近いもの、またやや凹んだもので、高台が皿と異なり高い。また底部が糸底のままのものが知られる。これ等の他に同図28.29のように丸皿と区別のつけがたいものが知られる。これ等の托の大部分は竊体上部に遺存していたものである。

そ の 他

一例であるが挿図6の23のような特殊なふちのある、糸切底のものが知られる。焼成は不十分で黄褐色を呈している。

鉢 類

挿図7に見られるように鉢類は、変化に富んだ器形のものが見られる。まず同図4は口径31cmの鉢であり、器高14.5cmと推定出来る。灰白色で砂質粘土を使用している。

同図1は、片口鉢で腰部に丸味を示し立ち上っている。口縁部の一部に内面よりなぞ出して注口がつくられている。高台は八字に開いている。同図2は器高が低く、口縁部に外反している。鉢の内面に段を有するもので、口縁部が対象的に四カ所、内側よりなでて凹を有するものである。同図3は同図2のように器高は低く、内面に段を有しているが、口唇部が内反している。これも四カ所に対象的に凹が見られる。同図4のものは胎土は良質である。

鉢の高台と思われる孔が穿かれているものが三点出土している。同図5は三カ所に有孔が見られる。軸調はあまり良好でない。

瓶 類

広口瓶と小瓶が出土している。広口瓶は、器形の復元出来るもの挿図8の1.2.3であり、この他にも口縁部の破片が見られる。同図2.3のように胴部に対し口径の大きなものが多い。また口縁端面は扁平に面取りされている。底部は断面四角形をなした付高台がつけられている。軸調の良好なものに「はけぬり」である事が知られる。同図6は口縁部と底部を欠いたもので肩の部分に稜を有し、青灰色の色調を呈している。その他に小瓶の口縁部と思われる

もの(同図6.7)が見られる。

壺 類

挿図8の7に見られるような短頸壺が一例であるが知られた。色調は黄白色で焼成は良好である。

硯

一例であるが挿図7の9, 図版8に知られるような硯が出土している。丸皿の三方を削り成形をなし, 底部に2本の脚を付けたものと考えられる。砂目粘土を使用しているが焼成は良好であり, 色調は灰白色である。美濃古窯址群では硯の出土は他に一例報告されている。^{註2}

蓋

挿図6の32, 図版8のような蓋の上部につまみがあり, ハート形の透しが三カ所に彫られているものが一例出土している。

窯 道 具

- ㊦ 挿図7の10, 図版8に見られるような三叉トチ^{註3}は, 底部の一边が約9.5cmで高さ5.5cmの大形のものである。
- ㊧ 窯内及び灰原に馬爪型焼台が1,318個出土している。これ等は図版8のように, 全てその上部に葉脈痕が認められる。
- ㊨ 挿図7の12に見られるような無袖の素焼状の窯道具と考えられるものが一点出土している。^{註4}上縁部はゆるい曲面で, 脚部に四角のあなが見られる。
- ㊩ その他, 挿図7の11及び図版10の上の碗の中に見られるような, よりつちが出土している。

山 茶 碗

窯体の北部の斜面にトレンチを設定して調査した地点より, 山茶碗片が出土し, 器形を明確に知るような遺物は見られないが, 挿図6の35~37のような碗の底部が見られ, ミコミ内部及び高台にはモミ痕が知られる。口縁部の破片も少量出土している。これ等の破片より推定すると腰部は丸味を有し, 口縁部に達する器形と考えられる。胎土は砂目の粘土を使用している。

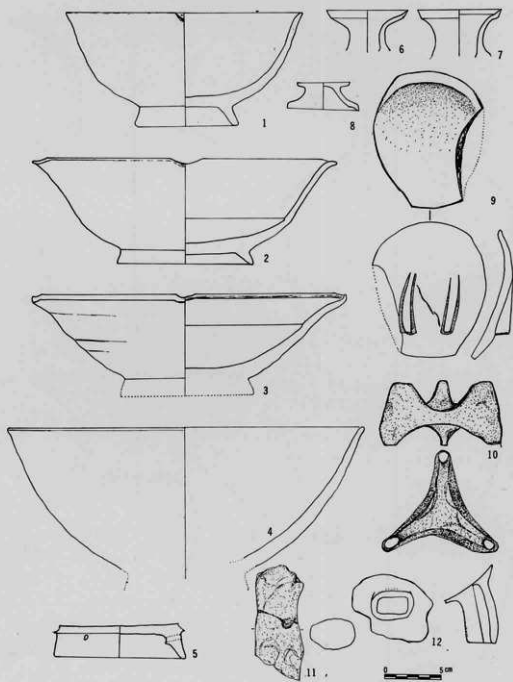
註 1. 今井静夫「丸石二号窯」『土岐市中央自動車道関連遺跡』土岐市教育委員会 1971年

註 2. 竹内蘭山他「虎溪山古窯址群」『平尾遺跡, 虎溪山遺跡』多治見市教育委員会 1970年

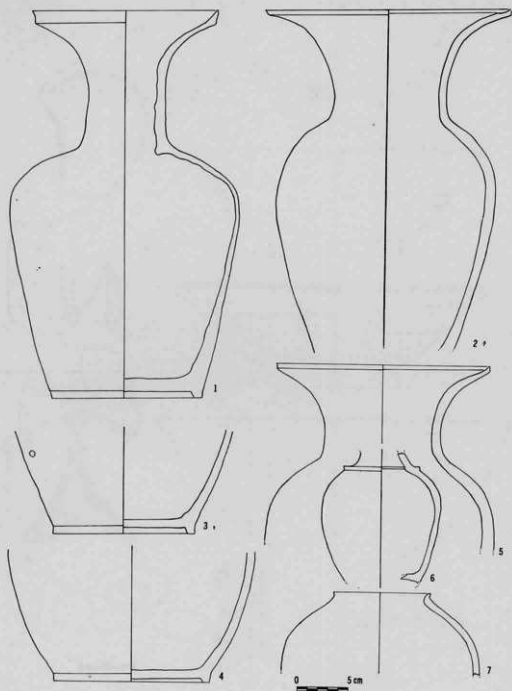
註 3. 三叉トチは美濃古窯址群では今日までに出土例を聞かないが, 美濃須恵古窯址で出土例があるので, 今後出土する可能性がある

註 4. 虎溪山第1号窯, 大原2号窯などに類似品が出土している

挿圖7 出土遺物実測図



挿圖8 出土遺物実測図



5. 出土遺物実測数値表

	Y2-1(窯内上部)	Y2-2(窯内下部)	Y1(灰原)	Y3(窯左上地点)	計
大 碗	6	4	1 2 3	2	1 3 5
中 碗			9	1	1 0
小 碗		2	1 9	1	2 2
輪花大碗		1	9		1 0
〃 中碗			1 2		1 2
〃 皿		1			1
丸 皿		2	4	1	7
段 皿		5	2 0		2 5
小 皿			2		2
耳 皿			1		1
托 皿	7	3			1 0
大 鉢			2		2
所 別 計	1 3	1 8	2 0 1	5	2 3 7

上記数は4点計測物のみ

窯内上部

遺物番号	品名	口径	器高	高台径	高台高サ
Y2-1-3	大 碗	14.5	5.0	6.7	1.2
〃 4	〃	14.5	4.5	7.2	1.3
〃 5	〃	15.5	5.0	7.0	1.3
〃 6	〃	15.0	5.3	7.0	1.4
〃 7	〃	14.0	4.8	6.5	1.3
〃 12	〃	14.5	5.0	6.6	1.3
〃 1	托	9.5	2.0	4.1	0.4
〃 2	〃	9.3	2.2	4.0	1.0
〃 15	〃	9.5	2.5	4.5	1.1
〃 19	〃	10.5	2.8	4.7	1.0

Y2-1-22	托	9.5	1.8	4.4	0.2
〃 24	〃	9.5	1.8	3.8	0.3
〃 82	〃	9.5	2.4	4.5	0.8

窯内下部

遺物番号	品名	口径	器高	高台径	高台高サ
Y2-2-1	大 碗	14.3	6.0	7.4	1.0
〃 2	〃	14.2	6.3	7.1	1.2
〃 174	〃	14.3	5.4	7.5	1.0
〃 201	〃	14.5	5.3	7.2	1.1
〃 177	輪花大碗	13.5	5.3	6.9	1.0

Y2-2-256	小碗	9.0	3.0	4.7	0.7
" 247	"	9.0	2.8	4.6	0.7
" 22	丸皿	10.3	2.4	5.2	0.5
" 268	"	10.0	2.5	4.7	1.2
" 254	段皿	10.0	1.3	5.6	0.4
" 255	"	10.0	1.8	5.9	0.6
" 257	"	10.3	2.5	5.8	0.6
" 272	"	10.5	2.2	5.4	0.4
" 276	"	11.2	2.4	5.5	0.4
" 273	輪花皿	11.0	4.3	5.4	0.8
" 253	托	10.5	1.9	4.4	0.4
" 269	"	9.5	2.5	0.8	1.2
" 271	"	9.3	1.8	3.7	0.3

Y1-145	大碗	15.0	6.5	7.3	1.2
" 146	"	14.5	6.0	6.6	1.1
" 147	"	14.5	6.0	7.1	1.0
" 148	"	14.5	6.5	6.9	1.2
" 149	"	14.5	6.8	7.7	1.3
" 150	"	14.0	6.0	7.2	1.0
" 151	"	14.0	5.5	6.2	1.0
" 152	"	14.5	6.0	6.5	1.0
" 154	"	14.5	5.8	6.6	0.9
" 156	"	15.0	5.5	7.3	1.0
" 157	"	15.0	6.0	7.1	1.0
" 160	"	15.0	6.0	7.6	1.0
" 162	"	14.2	6.5	7.3	1.2
" 167	"	15.0	7.4	7.2	1.1
" 168	"	14.0	6.8	6.8	0.9
" 169	"	13.5	5.7	6.7	1.0
" 591	"	14.5	6.2	7.4	1.1
" 592	"	15.0	6.5	6.6	1.3
" 593	"	14.5	6.0	7.7	1.2
" 594	"	14.5	6.0	7.1	1.0
" 596	"	14.0	6.3	6.9	1.1
" 597	"	14.5	6.0	7.2	1.1
" 598	"	14.5	5.5	6.9	1.0
" 599	"	14.5	5.5	6.8	1.0
" 639	"	14.5	6.6	6.8	1.1
" 640	"	14.0	6.0	7.0	1.1
" 650	"	14.0	5.5	7.2	1.1
" 651	"	14.5	5.8	7.1	1.1
" 652	"	14.5	6.0	6.4	1.0
" 656	"	14.5	5.8	6.9	1.1
" 658	"	14.0	5.5	6.9	1.0
" 659	"	14.0	5.8	6.8	1.0
" 664	"	15.0	6.0	7.8	1.2
" 665	"	15.0	5.5	6.9	1.0
" 667	"	14.0	6.2	7.5	1.0
" 668	"	15.0	6.0	7.1	1.0

灰原

遺物番号	品名	口径	器高	高台径	高台高寸
Y1-17	大碗	14.5	6.3	7.3	1.1
" 64	"	14.5	6.3	7.5	1.2
" 128	"	14.5	5.8	6.6	0.9
" 129	"	14.5	5.8	7.1	1.1
" 130	"	15.0	6.5	7.4	1.1
" 131	"	15.5	5.8	7.3	1.0
" 132	"	15.0	5.8	7.2	1.0
" 133	"	15.0	6.0	7.4	1.0
" 134	"	15.5	6.3	7.5	1.0
" 135	"	15.0	6.3	7.1	0.9
" 136	"	14.0	5.5	7.1	1.0
" 137	"	15.0	6.0	7.0	1.0
" 138	"	15.5	5.5	7.2	1.1
" 139	"	15.0	6.0	6.8	0.9
" 140	"	15.0	6.5	7.0	1.1
" 142	"	15.0	6.0	7.2	1.1
" 143	"	15.0	6.0	6.8	1.1

Y 1-669	大 碗	15.0	5.5	7.0	1.2	Y 1-745	大 碗	14.5	4.6	6.7	1.1
" 670	"	15.0	5.6	6.4	1.1	" 746	"	14.5	5.6	7.2	1.0
" 671	"	14.5	5.2	7.2	1.3	" 754	"	14.0	5.4	7.3	1.0
" 672	"	14.5	5.5	7.0	1.2	" 756	"	15.0	5.7	7.1	1.0
" 673	"	15.0	4.9	6.8	1.1	" 757	"	15.0	5.5	7.0	1.2
" 674	"	14.5	5.5	6.7	1.0	" 758	"	15.0	6.0	7.4	0.9
" 675	"	14.0	5.9	6.6	1.2	" 759	"	14.5	6.1	7.2	1.2
" 676	"	14.5	5.7	6.8	0.9	" 760	"	14.5	6.1	7.2	1.2
" 677	"	15.0	6.0	7.3	1.0	" 761	"	14.5	5.6	6.2	1.0
" 678	"	14.5	6.0	6.8	1.0	" 762	"	13.0	4.3	6.2	0.8
" 679	"	14.5	5.2	6.9	1.0	" 763	"	14.5	5.8	7.1	1.0
" 680	"	15.0	5.4	7.5	1.0	" 764	"	15.0	5.5	7.0	1.0
" 682	"	14.5	4.6	6.9	0.9	" 765	"	14.5	6.1	7.3	1.1
" 684	"	15.0	5.6	6.9	1.0	" 768	"	14.5	5.6	7.1	1.1
" 685	"	15.0	6.1	7.5	1.2	" 771	"	15.0	5.5	7.1	1.1
" 702	"	14.5	5.5	7.7	0.9	" 780	"	13.0	4.3	6.0	0.8
" 704	"	15.0	6.2	6.7	1.0	" 782	"	14.5	5.5	7.0	0.9
" 706	"	15.0	4.7	6.9	1.0	" 785	"	14.0	5.5	6.8	1.0
" 707	"	14.5	5.6	6.7	1.2	" 789	"	13.0	5.5	6.8	1.0
" 708	"	14.5	5.5	7.6	1.1	" 792	"	14.0	5.3	7.4	1.0
" 709	"	15.0	5.8	6.9	1.0	" 795	"	14.5	5.4	6.8	0.5
" 717	"	14.5	5.5	6.9	1.0	" 796	"	14.5	6.8	7.2	1.0
" 719	"	15.0	7.2	6.5	1.1	" 797	"	14.5	5.7	6.8	1.0
" 720	"	15.0	5.7	7.4	1.0	" 801	"	14.5	6.0	7.1	1.1
" 721	"	15.5	6.3	7.4	1.2	" 802	"	14.5	5.8	6.4	1.1
" 722	"	14.5	6.3	7.1	1.0	" 803	"	15.0	5.5	7.1	1.1
" 724	"	14.0	6.0	6.7	1.0	" 804	"	15.0	5.5	6.9	1.1
" 729	"	14.0	5.8	7.1	0.9	" 822	"	14.5	6.5	7.0	1.0
" 730	"	14.0	6.3	6.9	1.1	" 824	"	14.5	6.3	7.5	0.9
" 732	"	14.5	5.6	7.1	1.1	" 828	"	14.2	5.8	6.9	1.1
" 734	"	15.0	5.5	5.8	1.1	" 840	"	14.5	5.8	7.8	1.0
" 735	"	14.2	5.7	6.9	1.0	" 842	"	15.0	6.0	7.8	1.1
" 739	"	14.5	5.3	7.3	1.0	" 843	"	14.5	6.0	7.2	1.1
" 742	"	15.0	5.3	6.6	1.2	" 845	"	14.5	5.5	6.3	1.1
" 743	"	15.0	5.6	7.5	1.0						
" 744	"	14.5	5.7	7.0	1.1	Y 1- 14	中 碗	11.5	4.5	5.5	0.8

Y1-15	中 碗	10.8	4.0	5.5	0.7	Y1-737	大輪花	15.0	5.0	6.1	1.0
" 22	"	11.0	4.0	6.0	0.9	Y1-9	中輪花	10.8	4.0	5.6	0.8
" 23	"	11.5	4.0	6.5	1.1	" 13	"	10.5	3.8	5.8	0.8
" 43	"	11.5	4.3	5.6	0.8	" 26	"	11.5	3.8	5.3	0.8
" 45	"	11.5	3.8	5.6	0.6	" 31	"	11.5	3.5	7.0	0.5
" 57	"	11.0	3.5	5.5	0.7	" 44	"	12.0	4.2	5.8	0.7
" 175	"	12.5	4.2	5.5	0.8	" 47	"	11.5	3.8	5.5	0.7
" 243	"	11.5	4.3	5.5	0.3	" 56	"	10.0	3.7	5.1	0.8
Y1-10	小 碗	10.0	3.2	4.7	0.7	" 83	"	11.0	4.2	5.5	0.9
" 11	"	9.0	3.0	4.5	0.6	" 84	"	11.0	3.8	5.8	0.6
" 12	"	9.0	3.2	4.7	0.7	" 208	"	11.5	3.8	5.4	0.6
" 25	"	9.0	3.3	4.9	0.7	" 627	"	11.0	4.0	5.2	0.9
" 30	"	9.5	3.0	5.7	0.6	" 838	"	12.0	3.5	6.1	0.7
" 34	"	8.5	3.0	4.7	0.7	Y1-837	丸 皿	10.5	2.5	5.4	0.6
" 35	"	9.5	3.2	4.7	0.7	" 838	"	12.0	3.5	6.6	0.7
" 36	"	8.0	3.0	4.7	0.7	" 844	"	10.5	2.5	6.3	1.1
" 37	"	8.5	2.7	4.9	0.6	" 859	"	11.0	2.2	5.7	0.5
" 38	"	9.5	3.0	4.9	0.6	Y1-839	小 皿	10.0	2.5	2.5	0.5
" 49	"	8.5	3.0	4.9	0.6	" 856	"	8.65	2.0	4.1	0.6
" 68	"	9.0	3.4	4.2	0.6	Y1-20	段 皿	11.5	2.5	5.4	0.7
" 85	"	9.0	3.0	4.8	0.6	" 40	"	11.5	2.5	5.5	0.6
" 86	"	10.0	3.0	4.9	0.7	" 41	"	11.0	2.5	5.8	0.6
" 87	"	8.5	2.5	4.9	0.7	" 42	"	10.5	2.5	5.8	0.5
" 104	"	8.5	2.8	4.6	0.7	" 50	"	7.6	1.9	4.9	0.6
" 588	"	9.2	3.2	4.9	0.7	" 53	"	10.0	2.0	5.4	0.6
" 637	"	8.2	3.0	4.3	0.7	" 60	"	11.2	2.8	5.1	0.7
" 832	"	9.2	4.9	5.0	0.6	" 71	"	12.0	2.7	5.8	0.8
Y1-141	大輪花	15.0	5.5	6.8	1.1	" 91	"	11.0	2.5	5.9	0.4
" 144	"	15.0	6.0	6.8	1.1	" 93	"	10.5	2.3	6.0	0.4
" 163	"	15.0	6.3	7.4	1.1	" 94	"	11.0	2.5	5.3	0.4
" 164	"	15.0	6.5	6.5	1.2	" 95	"	11.0	2.0	5.4	0.5
" 165	"	14.5	5.5	6.9	1.0	" 179	"	10.0	2.0	5.3	0.5
" 654	"	13.5	5.2	4.9	1.0	" 231	"	10.5	2.5	5.4	0.7
" 692	"	14.0	5.3	7.4	1.0	" 586	"	11.5	3.0	5.9	0.6
" 696	"	14.5	6.8	7.2	1.3						

Y1-611	段 皿	11.5	2.3	5.2	0.4
" 631	"	11.5	3.0	6.1	0.7
" 632	"	11.5	2.6	5.2	0.5
" 635	"	11.0	2.5	6.0	0.6
" 660	"	10.0	2.5	5.2	0.5
Y1- 4	耳 皿	11.5	4.0	4.5	0.4
Y1-302	大鉢 (片口)	20.7	10.0	9.0	1.7
Y1-306	大鉢 (四ツ口)	26.5	9.3	11.9	1.2

古窯左上地点

遺物番号	品 名	口径	器高	高台径	高台高 ^註
Y3- 1	丸 皿	8.5	1.9	4.6	0.4
" 2	中 碗	11.0	3.2	5.5	0.5
" 3	小 碗	9.5	2.0	5.4	0.2
" 4	大 碗	15.5	6.7	7.4	1.0
" 5	"	15.2	5.9	6.0	1.0

6. 輪花施文の技法について一、二の考察

輪花碗、段皿などの口縁部に見られる輪花施文の変遷について、田口昭二氏は「美濃古窯の灰軸陶器と山茶碗の編年^{註1}」の中で、ヘラ押圧、ヘラ仕上指圧（三分類）して窯期とその変遷を考察されている。しかし施文時における器物の内面に見られる状態と、その施文技法は明瞭にされていない。今回、谷迫間古窯の遺物に好資料が出土しているので、一、二の考察を試みることにする。

図版12左上に見られるような工具による押痕と考えられるものは、その外面の文様と内面に対称した一条の指圧痕が見られ、その右がわにもう一つの指圧痕が認められる。従ってこの施文方法は器面外部に工具をあて親指で押え人差し指で内面よりはさみ中指をそえて外部の工具を押しながら指を口縁部に向けて移動する事によって付けられたと考えられる。したがって、この方法のものは表面の文様の幅も0.3cm内外で鮮明であり、文様の長さもほぼ一定している。

次に指圧痕によるものは、器物外面に指圧による幅の広い施文が見られる（図版12上段右、同図下段右）。また、内面には前者と異なり外面の施文に対して左右に二条の指圧痕が見られる。これは外面に親指をあて、それを中心にして人差し指と中指で内面よりはさみ口縁に向けて指で指圧痕を付けて輪花文を施文している。従って文様の長さも不揃いである。（大江傘）

註 1. 田口昭二「美濃焼の起源を探る」—美濃古窯の灰軸陶器と山茶碗の編年—多治見市立精華小学校 1973年

7. む す び

今回の調査の対象となった谷迫間古窯は、美濃古窯址群において一般的に見られるような丘陵の一面に立地している点と、窯業のものに欠く事の出来ない水利は古窯の東部の下に谷水が湧いていてそれを考慮しながら立地している。

窯体の南部に平坦な地点があり、その地点の一部を調査したが、窯層で遺構の確認は出来なかった。また窯体の北部にもトレンチを入れて調査したが、山茶碗の破片が出土したのみであった。

今回の調査で知られたものは、窯体1カ所と、出土遺物として平安灰釉陶器、そして、碗、皿、鉢、壺、瓶、蓋、窯道具、少量であるが山茶碗片(無軸)が出土したのである。窯体の時期については、大阪大学基礎工学部研究室の協力を得て、次のような結果が出たのである。

偏角 $D = -63^\circ$ 伏角 $I = 519^\circ$ 誤差角 $\sigma 95 = 1.8^\circ$ 推定年代 1085 ± 30

一応この結果を谷迫間古窯のデータとして、また今後他の多くのデータが求められ、研究の上に役立つと考えられると共に、今日までに測定された平安灰釉の窯址のデータとの関係を見ると、土岐市丸石一号二号は1,100推定年代が出されている。^{註1}遺物の上より見ると碗類にも二種類の腰部に丸味を有するもの、有しないもの、また段皿も段部が非常に粗雑である点、また形式的な段部の成形の方法など、^{註2}共通点が多く見られる。これ等の器物の形態を考慮した上で、現段階では平安末期に位置づけられる。

遺物については、色々と変化に富んだものが多く製造されているのと、中でも大鉢に分類されるものに、内面が段状を示し四ツ口状を示すものがある。これは片口のように流動物を流すものとは異なり、装飾的なものと考えられる。瓶類の中で口径と胴部がほぼ同じような特長を示すものが多く見られる。また灰原より馬爪型焼台が多量出土している点と遺物に色々な形式が見られる点などから、ある程度ながく陶器の生産が続けられていた事が考えられる。

次に図版12の中左の輪花碗片の内面にに見られるように、技法の点で輪花をつける場合に器の内面に二本の指を入れ、外面に指または工具をあて引上げて付けられている事が明確にされる資料が多く出土している。窯壁の補修のためにか、また何らかの事情によって布を当てた痕が知られる。また、窯道具として三叉トチの出土が一例知られたが、この三叉トチも地方の調査が進むにつれて更に発見されるであろう。その外好資料を出土したのであり、各地との関連性については別の機会に考察を進める事にする。(大江 命)

註 1. 大江命「土岐市中央自動車道関連遺跡」土岐市教育委員会 1971年 總括 119頁参照

註 2. 今井静夫氏も前提書中「丸石三号窯」の遺物で指摘しておられる。

圖 版



谷迫岡古窯遠景



発掘以前の遺跡の状況



発掘風景



窓 体



煙道部からみた窓体



窓壁の一部



煙道部の遺物遺存状態



室内の遺物遺存状態



灰原の遺物出土状態



灰原堆積状態



大 碗 ↑→



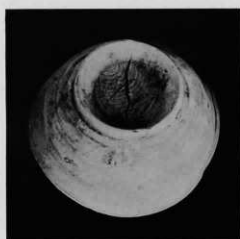
輪花大碗



同左上底部



大 碗



同上底部



中 碗



小 碗



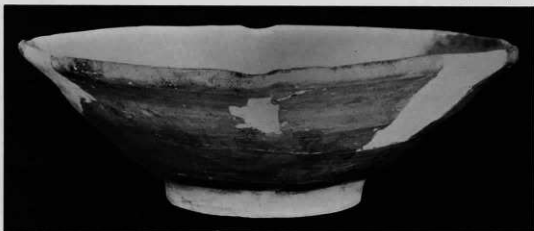
托および小皿



同上底部



大鉢



大鉢



片口大鉢



廣口瓶



廣口瓶



廣口瓶



瓶



蓋



大鉢底部



口縁部

台部？



碗



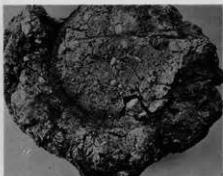
蓋



同上底部



三叉トチ



馬爪型焼台



托



小碗と耳皿



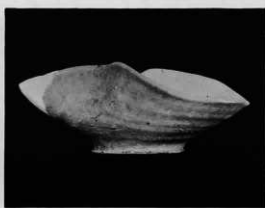
同上底部



同上底部



耳 皿



同 左



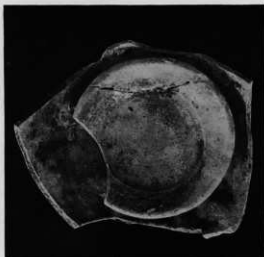
大 碗



大碗と小皿



窯 道 具



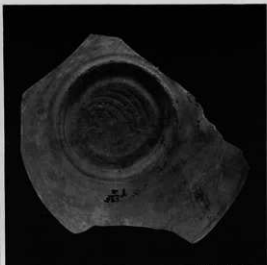
同 上



窯壁に見られる布目痕



丸 皿



同左底部



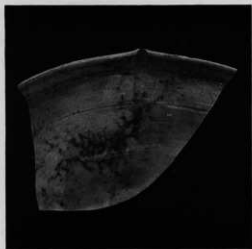
山 茶 碗



同左底部



山茶碗底部



輪花碗片



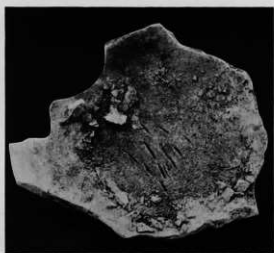
輪花碗



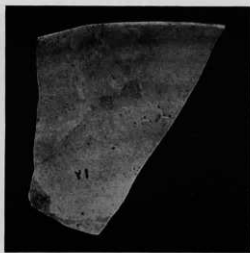
輪花碗片



同左内面



小皿の内面



輪花碗片

昭和49年2月25日 印刷

昭和49年3月1日 発行

発行所 岐阜県教育委員会

可児町教育委員会

岐阜県可児郡可児町
電話 (05746) 2-1118
